

京鹿子

昭和二十三年九月一日創刊
平成十七年三月一日発行
通巻九六七号（毎月一四一日発行）



3月号

名のみ春
丸山佳子

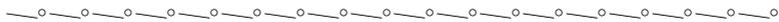
一善の心にさせる百合かもめ

はらひたまへ浄めたまへと山眠る

眠らずに枯木どうしの立話

沈黙は宝にあらず寒椿





赤
す
ぎ
て
鳥
も
一
瞥
ピ
ラ
カ
ン
サ

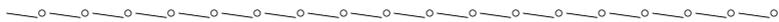
名
の
み
春
人
の
声
ま
つ
岩
の
数

枯
尾
花
イ
コ
ー
ル
わ
た
し
も
生
か
さ
れ
て

雪
止
ん
で
時
の
氏
神
電
話
鳴
る

去
年
こ
こ
で
冬
将
軍
に
今
年
ま
だ

寒
大
虹
わ
が
故
郷
も
「
市
に
」
な
つ
て



清響集
その四十七

豊田都峰



初 愛 宕 わ が 窓 景 の 上 座 な る
初 茜 水 平 線 を ま づ 引 け り
初 鴉 流 離 は じ ま る こ と な ど は
ま た 渡 り き た る も 此 岸 枯 木 立
長 々 と 橋 越 え ざ れ ば そ れ も 凍 て
ふ り む け ば ま た 冬 枯 の 礎 な か ば

秀華採集

逃亡の愛しさを秘め枯芒

三浦永子

芒の丈に逃げ込む。たとえ逃げて、まして枯芒では透けもするだろう。しかし、逃げ込んだのである。そこに人間の姿を見た時、「かなしさ」と言わざるを得ない。そんなすべてを秘めて今枯芒は広がり揺れているのである。

菊焚きて跡を湖辺の香となせり

松本鷹根

寒の鯉水の重さになりきつて

田村みどり

鷹根作品のささいなものど広がりとの関係、みどり作品の寒鯉の本質的把握をそれぞれ評価したい。

鈴鹿 仁

凍 鶴

凍鶴の一本脚の白い刻
頭上から麒麟の吐息睦月果つ
いちにちを山河に和して葉喰
冴返る男ひとり音立てて
強情の情使ひよう寒戻る
遠い日はたとへば夢幻竜の玉
冴返るこれやこの山京を守る

近 詠

宇都宮滴水

紙の雛

浮寝鳥流るる渦の愚鈍にも
寒猿へ声かけヒトになつてゐる
悴みの風態のまま留守まもる
躓きの因とも知らず石凍みる
曇天へ冬芽の赤は我意もたず
春愁や栞のさだめよく動く
紙の雛一とへの風のうごきにも

神麓集



大根干す足へ道きく岐れ道
七五三孫が晴れ着をみせにくる
秋寒し勝つてくるぞの鼻が折れ
身に沁むや京の寒さは比叡より
冬帝は景色も人も引きしめる

岩崎 憲二

裏門を石組みにして石路咲かす
湖辺踏む一途の枯れに犬吠ゆる
枯れ葦の彩で湖辺に消えてゆく
病院と学校見つけ枯野去る
藁塚の杭の踏ん張り風慣らす

松本 鷹根

男なら開つくるべし初茜
御降や父の着物の身に添ひて
二日はや紙折る指に力込め
日本の米の白さよ七日粥
年賀客あり酉年の末茶碗

高木 智

寄り添ひて犬と猫との日向ぼこ
九つの葉飲み別け日向ぼこ
七五三羽織袴に背は誠
初冬の小雨に黒い傘降す
男にも小春日和の洗濯日

洗濯日 森津 三郎

黄葉一と葉水に凡夫の流転とも
濡れ落葉磴にすがりて朱に徹す
黄落の梢をさ迷ふ旦暮の陽
冬帝の登音恐るる寡黙の灯
腐葉土と化しゆく落葉に明日がある

落葉 荻野 千枝

油絵の波止場が冬となつてゆく
風邪声のコンビニ店主敬語にて
死神が迷ひ込みたる冬の町
隧道の中の停滞風邪心地
雪となる刹那の雲へサーチライト

風邪 丸井 巴水

神麓集



初 春 丸井 巴水
 奇術種明かせし除夜の鐘半ば
 初春や二番鶏なる心地よさ
 鶏卵を割り新春の月をだす
 そこぬけの天へ墜ちゆく凧ひとつ
 降る雪の裏は暗闇鐘を撞く

相 性

竹貫 示 虹

キヤラメルの黄色い天使青き踏む
 山笑ふ酒の空壇溜める趣味
 白壁の倉袈裟がけにつばくらめ
 穂の芽を揚げ酔心と相性よし
 死ぬまでのむ薬十つぶや水ぬるむ

暮秋の灯 北川 孝子
 遍照の世ながれ遠山寝ね仕度
 冬帝や木の透き己がこころ透き
 人のうしろ見の果報や黄落季
 冬帝の川幅むらさきぼかしかな
 箸袋きれいに溜めて暮秋の灯

西 年 川崎光一郎
 銀河系の端つこに棲み年の暮
 空白は病みし日月古日記
 鶏口の気骨と明くる酉の年
 初鶏や老いて午後となるもよし
 人日や土に帰せぬもの多き

高橋 千美

紅葉濃しカメラの向ける勅使門
 十字架に日の当りある冬景色
 橋に佇ち橋を見てゐる年の暮
 竹生島見ゆる二階の年忘れ
 炬火赤し貧しき頃の話して

十二月八日を海は忘れない
 笠間 圭子
 日暮れ来るうしろ冬至の長い影
 石路咲いて忠臣蔵の後日談
 元朝の海へ肥後ちやば鬨告げる
 炬燵寝のとり一病飼ひ馴らす



京鹿子集

豊田都峰選

紅葉やもう散ることをためらはず
逃亡の愛しさを秘め枯芒

横浜 三浦 永子

霜の夜の星は眞水の匂ひする

憂きことのふつと離るる日向ぼこ

老いてこそ人恋しかり大根煮る

膝打つて次の日晴れる黄水仙

遺影の前で熟柿になるは厄介な

冬ぬくし燃えないゴミに男靴

裸木の一枝豹よりも撓ひ

寒の鯉水の重さになりきつて

菊焚きて跡を湖辺の香となせり

城陽 松本 鷹根

鴨数ぞふ山並淡く湖北霽れ

歩む鳩落葉一途に陽の公孫樹

賊軍となりし土地なり冬日なびく

逆光に目を細め見る枯れの果

郁子熟るる熔岩に体温あるやうに

砂風呂はひとりの宇宙鎌の月

恋塚や榎櫃の歪つ成りつづく

刃こぼれのなく転生す一位の実

世はなべて楽市楽座葛湯吹く

冬木の芽ことば探しの逆光に

文旦の食べ頃届く仮名便り

東京 木山 杏理

千葉 伊藤 希眸